

文献紹介：Carmine Crocco Donatelli『私は如何にしてブリガンテになったか』“*Come divenni brigante*” —イタリア統一期に活動した「山賊」の自伝—

亀崎 洋太

KAMEZAKI YOTA

東京外国語大学大学院博士前期課程
Tokyo University of Foreign Studies, master's student

原稿受理日：2020.1.8.

Quadrante, No.22 (2020), pp.281-283.

1861年、イタリアは統一を成し遂げた。その頃、南部地域において大規模な動乱が発生していた。ブリガンテ (brigante) 「山賊」と呼ばれた人々の集団が町や村を襲い、略奪、放火、殺人などの犯罪行為を繰り返し行っていた。誕生したばかりのイタリア政府はこの動乱をブリガンタッジョ (Brigantaggio) 「山賊大反乱」と呼び鎮圧を試みたが、それにはおよそ10年もの歳月がかかったと言われている。

統一国家が出来たばかりの頃にこの未曾有の大事件を引き起こした「山賊」達の多くは農民であった。19世紀の中頃、イタリア南部の農民は地元のブルジョアジーとの関係において、常に搾取される立場にあった。彼らは貧しく、そこから生まれた社会への不満、怒りは長い年月にわたって農民たちの間に蓄積されていった。通説として、ブリガンタッジョの原因の一つはそうした農民たちのフラストレーションであり、それが国家統一という政治的インパクトをきっかけに爆発したのだと言われている。

しかしながら、ブリガンタッジョをそうした単なる農民蜂起のようなものであると簡単に言い切ることはできない。もし仮にそうであるならば、長い間イタリア政府を苦しめた大事件にはなり得なかっただろう。反乱が大規模で持続的なものになった理由の一つとして、イタリア南北の政治的対立があると言われている。イタリアの統一は、サルデーニャ王国による他

国の併合という形で達成された。よって当然ながら、それに同意しない国も存在しており、特に南部の両シチリア王国とローマ教皇領は統一に強く反対していた。両者は秘密裏に農民たちに蜂起を促し、彼らに武器などを密かに与えていたと言われている。ブリガンテはイタリア統一を支持するブルジョアジーを狙って襲撃を行うことが多かったとされているが、それは正にブリガンテの活動の裏に政治的対立が存在していたことの表れでもある。

文字通り国を揺るがすほどの大事件であったブリガンタッジョは、当時においては言わずもがな、また後の時代においても人々の強い関心の的であった。これまでにおいて、ブリガンタッジョに関する研究は数多くなされている。

しかし、ブリガンタッジョ研究はある一つの困難な問題を抱えている。それは史料の偏りである。ブリガンタッジョに関する史料の多くは、政府の関係文書や地方自治体の残したブリガンタッジョの活動に関する記録であり、ブリガンテらが自ら残したものではない。ブリガンテであった人々の多くが読み書きのできない農民であったという事実がある以上、史料の偏りはあるものの、そうした問題を克服しない限りはブリガンテ達に肉迫していくことはできない。

史料に偏りがあるとはいっても、ブリガンテ自身が残した史料が一つもないというわけではない。本稿において紹介する文献は、ブリガンテの集団のリーダーとして活動したカルミ



ネ・クロッコ（Carminе Crocco）の自伝である。彼は1861年頃よりブリガンテとして活動を始め、1864年に政府軍の手によって捉えられるまでバジリカータ州を中心に町や村に多くの被害をもたらした¹。逮捕された後、ポルトフェッラーイオ（Portoferraio）の刑務所において終身刑となった彼は、1889年から自伝を書きはじめた。クロッコは初等教育を受けていた為に文字を書くことができたが、彼が書き残した文章はエウジェニオ・マッサ（generale Eugenio Massa）という人物によって修正が加えられ、その後に『私は如何にしてブリガンテになったか』“Come divenni brigante”というタイトルの本として1903年に世に出されることとなった。本書は現在でもペーパーバック版、電子書籍版など様々な形で出版されており、筆者が実際に手にしているものは2015年に Createspace Independent Pub から出版されたものである。編者による序文がついているが、内容自体は電子書籍などの他の版と比較するに、特別な変更はなされてはいないとみられる。

自伝は全八章で構成され、それぞれ「幼少期」（L'infanzia）、「最初の罪」（Il primo delitto）、「政治的ブリガンテ」（Brigante politico）、「ブリガンテの将軍」（Generale dei briganti）、「ボルヘスと共に」（Con Borjès）、「孤立した攻撃」（Attacchi isolati）、「逃亡と監獄」（La fuga e la prigionia）、「結末」（Conclusione）とタイトルがつけられている。以下では各章の概要を述べる。

まず第一章「幼少期」では彼が幼かった頃の家族との思い出が語られ、そして彼の人格形成に大きな影響を与えたとされる二つのトラウマ的事件——母の精神病と無実の罪による父親の監獄への収監——が述べられている。

第二章ではクロッコの青年期が語られている。彼は19歳の時にブルボン軍に徴兵されるも、「妹の名誉」を貶めた人間を殺めたことにより軍から脱走する。その後、数名の仲間と共に彼はバジリカータ地方において、統一反対派のブルジョワジーなどから支援を受けながら、ブリガンテとしての活動を始める。

第三章と第四章では彼がブリガンテとして戦った数々の戦や襲撃した町で救世主として熱烈な歓迎を受けたことなどの他に、彼らブリガンテの衣食住についてもかなり詳細に記されている。

第五章の「ボルヘスと共に」では、1861年10月にラゴペーゾレの森で出会ったスペイン人正統主義者、ヨーゼフ・ボルヘス（José Borjès）との出会いや彼との共闘が語られている²。

第六章の「孤立した攻撃」では、彼が次第にイタリア政府軍によって追い詰められていく過程が述べられている。この章は前章までとは違い、日付などの記述があいまいで、一年単位で話が飛んでいる箇所も散見される。出来事に関する叙述に軽重があるのは、自伝の史料としての特性として仕方のないことであろう。

第七章ではついに彼が戦いをあきらめ、政府軍に部下たちと降伏する。彼は数えきれないほどの罪状を抱えていたにも関わらず、死刑ではなく、終身刑に処され、1905年まで監獄の中で生き延び続けることとなった。彼が死刑にならなかった理由の一つとして、元ブルボン政府や教皇庁の働きかけがあったと言われており、そうした事柄についてもクロッコはこの章において言及している。最終章ではクロッコがこれまでの行いを総括し、ある種の後悔の言葉で彼の自伝を締めくくっている。

近年、ブリガンタッジョは国民国家にかかわ

¹ Crocco Carminе Donatelli, *Come divenni brigante*, Createspace Independent Pub, 2015 p.109. 彼が犯した罪は少なくとも75人の殺人と120万リラの損害であり、その他にも多くの余罪があるとみられている。

² Ibid., p.65. クロッコはボルヘスに対して当初より嫌悪感を抱いており、実際共闘していた期間は非常に短かった。ブリガンテであるクロッコと、ブルボン政府再興を目指す軍人ボルヘスとは、戦いの目的が違った。このことは、ブリガンテの性格を考えるうえで非常に重要と思われる。

る問題として捉えられるようになってきている。イタリアが一つの国家として統一されようとする、まさにその時発生したブリガンタッジョという大規模な動乱は、確かに国家が内に抱える対立、矛盾を表していると言うことができる。事実、最近のイタリアではブリガンタッジョを研究することによる、国家統一過程の見直しが活発にされるようになってきている。

イタリアの国家統一といえば、ガリバルディの千人隊やオーストリアに対する勝利など、華やかな場面が強調されることが多い。しかしブリガンタッジョは、いうなればイタリア統一の影の部分であり、その部分を見つめなおすことでイタリア統一をより深いレベルで捉えることが出来るだろう。

統一を成し遂げたばかりのイタリア政府は、ブリガンタッジョを国の秩序を乱し危機をもたらすものとして、徹底的に弾圧した。イタリア政府が同じ「国民」であるはずの南部の人間に銃を向けたということは、どういった意味を持つのか。最近では統一を進める政府が南部地方出身の兵士なども動員しながらブリガンテ達を厳しく弾圧したことをイタリアにおける「内戦」(guerra civile)として理解しようとする試みも出てきている。

近代史における国民国家の問題としてブリガンタッジョを捉えた時、クロッコの自伝はより一層重要度を増すことになるだろう。彼の自伝から南部の人間のイタリア国家に対するイメージや考えをすくい出し、統一を進める北部政府の思惑と並べて比較することは、イタリア統一が抱えた矛盾や対立を理解することにつながる。

自伝の中からクロッコの文章を一つ、具体例として引用する。彼は対峙したイタリア政府の将軍に対して「あのピエモンテの将軍と彼の部下は我々南部の人間をなんと低俗な存在であると捉えているのか。私たちが皆悪人であると考え、敵意を持って向かってきている。」³と

いう思いを抱いていた。前述したようにクロッコは殺人を犯したことにより正規軍を離れ、その後にブリガンテになったのであり、当初より彼のブリガンテとしての目的がイタリア政府の打倒ひいては両シチリア王国の再興であったわけではない。しかし引用した文に見るように、彼は南部の人間としてイタリア政府や北部の人間を敵視していたのである。

クロッコのように北部のイタリア政府に対して否定的な感情を抱いていた人間は南部地域には多かったといわれている。自分たちの生活していた地に突如として侵入してきた「外」の人間に対して南部の人間が抱いた反感は、19世紀後半においてもイタリア「統一国家」という概念が必ずしも自明のものではないということを示している。

このブリガンタッジョという歴史的事件にみられる国民国家の問題は、現代にも通ずる問題であろう。今日でも世界各地において国家という枠組みにおける排除、統合といった問題は非常に重要なものとして取り扱われている。

クロッコの自伝を読み、当時の歴史的状況を想起することは、イタリア史の理解を進めることにも、現代においても存在する普遍的な問題について考察することにもつながる。

³ Ibid., p.51.